九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

オンライン英語学習による国際コミュニケーション能力の向上策

鈴木, 右文
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/5610

出版情報：言語文化論究. 20, pp.55-65, 2005-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

オンライン英語学習による
国際コミュニケーション能力の向上策

鈴 木 右 文

1. 本論の目的

本稿は、オンライン英語学習ソフトのネットアカデミー（NetAcademy）を利用して、筆者が2003年度後期、2004年度前期に連続して試行した授業の受講者における英語力の顕著な伸長を基にして、国際コミュニケーション能力の向上を目指した大学英語教育における、このようなタイプのオンライン英語学習の有効性を主張する。

2. ネットアカデミー の導入

九州大学では2003年6月に、学生と教職員に対して、オンライン英語学習システムであるネットアカデミーの供用が開始された。[1] そもそも民間企業であるアルク社の製品ではあるが、全国で導入校は数百を数えており、大学英語教育の世界に広く浸透している。このシステムは、情報基盤センターの技術的支援を受け、大学院言語文化研究院が運営している。

このシステムは、学内ドメインの中にあるコンピュータ端末で利用するもので（残念ながら自宅など学外からの利用は開発業者により禁じられている）、高性能なサーバの導入を要する。このサーバを学内に置き、各利用端末へ教材を供給するが、各ユニットごとの配信になるので、常時接続されているわけではなく、従って同時に利用可能な人数も思ったより多い。幾つものコースが用意されているが、九州大学で導入されたのは、「スタンダードコース」、「初級・中級者のための TOEIC テストスコアアップコース」、「IT時代の技術英語＜基礎＞コース」の3コースである。筆者が授業で利用したのは「スタンダードコース」であり、他の2コースについては効果を検証していない。

「スタンダードコース」は、TOEIC テスト対応型の、リスニングとリーディングを中心とした英語教材で、3つの部分に分かれており、“リスニング力強化コース”が50ユニット分、“リーディング力強化コース”が50ユニット分、そしてさらに“TOEIC テスト演習コース”が10ユニット分ある。[2] 各ユニットは、きちんと取り組めば10分や15分といった短時間では終えることができない学習分量を持ち、学生が授業以外の時間にも情報教室等で取り組むとしても、とても3ヶ月や4ヶ月（1学期）ですべて終わるようなものではない。

これらの3つの部分の学習に入る前に、学習者はまず“レベル診断テスト”を受験しなくてはならない。リスニングと語彙に関する問題に解答すると、その結果が教材側で自動採点され、自分の英語力の目安がわかり、また、どのレベルのユニット（レベルが星の数で示されている）の学習が推奨されるかが示される。

“リスニング力強化コース”の各ユニットでは、内容理解のチェックやスクリプト・和訳・注

釈の参照で学習を進めるが、スピードコントロールの機能により、聞き取りにくい箇所は速度を落として聞くことができる（音質は変わらない）のが特徴である。“リーディング力強化コース”の各ユニットでも、自分の選択に応じたペースや方法で次々ハイライトされて現れる文章を読んでいくことができ、活字教材では実現しにくい練習方法を提供している。“TOEIC テスト演習コース”は TOEIC の出題形式に近いが、リスニングとリーディングがそれぞれ20問という少な目の分量になっており、TOEIC の本試験と同様のそれぞれ100問で正味2時間という出題形式が90分枠の授業では難しいので、ありがたい存在である（5.3に述べるように、問題数が少なくても模擬的試験としての精度はかなりあるものと思われる）。

「初級・中級者のための TOEIC テストスコアアップコース」の方は「スタンダードコース」と同様の構成だが、対象者が基礎固めを狙う層に絞られる。「IT時代の技術英語＜基礎＞コース」は、理工系の学生を主に意識した、単文中心のアカデミックライティングの基礎的演習である。

システムの詳細と学内利用者の諸手続等に関しては、田中省作・徳見道夫（2003）を参照してほしい。

3. 導入の意義

このネットアカデミーというシステムは、授業で利用することも可能だが、学内のコンピュータ端末上で個人が時間に束縛されずに利用できるものなので、各利用者のペースに従い、他の授業等の合間に学習を進めることもできる。従って、自習を前提とした使い方により、自分の好きなペースで学習を進めていくことができ、それをカリキュラムの中に取り入れて、一斉授業を実施することなく単位を認定することもまたできるであろう。九州大学ではそのような具体的な検討はなされていないが、導入された大学等で、教材内容を高く評価し、大学英語教育における人間教師とコンピュータの分業を意味あることと認めるなら、ネットアカデミーはコンピュータに登場してもらう部分として有力候補のひとつになるであろう。[3)]

また、第5節で示されるとおり、このようなオンライン学習を経た学習者の英語力は大きな伸長を見せ、学習効果は大である。この他、このようなシステムが持つ効能を挙げると、学習履歴が保存されること（しかも運用者によって集中管理できる）、授業以外の形で学習機会を提供できること、学内であれば学習場所を選ばないこと、学習者が能動的にアクションを起こさないと先に進まず受身の学習にはなりにくいことなど、枚挙に暇がない。

このオンライン学習が TOEIC を意識したものであることも注目に値する。大学が提供する英語学習教材が国際英語検定試験を考慮したものであるということは、その大学では英語の国際コミュニケーション的側面を重視すると宣言しているようなものであるが、そうした側面は、いわゆる教養的側面と車の両輪を成し、大学の卒業者に対する現代社会の要請もあって、大学における英語学習では欠くべからざるものになってきているように思われる（もちろん教養的側面も必要不可欠であると考えるが、その点に関しては特に述べない）。

4. ネットアカデミーを利用した英語授業の試行

筆者は、九州大学への2003年6月のネットアカデミー導入の後、このシステムの効用を検証するため、さっそく2003年度後期と2004年度前期にネットアカデミーを利用した授業を試行した。

4.1. 2003年度後期の英語授業

2003年度後期に、筆者は2年生を対象とした英米言語文化演習Ⅱという授業でネットアカデミーを利用した。これは、内容に基づいて複数の開講クラスから受講者が希望クラスを選択する授業（定員以上に希望者があった場合は抽選）のひとつで、多くの学生が自ら望んで受講を志望したと言える。

この授業には、受講者本人の希望に基づいて、工学部2年生が9名、理学部2年生が43名、この他に理学部3年生2名と経済学部3年生1名がそれぞれの事情に従って加わり、あわせて55名の受講者があった。教室は、外国語教育用で授業の空き時間には利用者に開放しているCALL教室を利用した。

初回の授業でネットアカデミーの利用方法を説明し、こなすべき分量をノルマとして指定して、その後2回目の授業からはコンピュータを前に自習してもらった。教員は直接授業を行ったわけではないが、学生の間を巡回して、教材やコンピュータに関する質問を受けたり、マシントラブルを解決したり、管理者としてログインし学生の学習状況をチェックするなど、暇なことは決してなかった。ノルマとして設定された分量は、授業時間内の取り組みだけでは終わらないだけのものとしており、授業の合間等にも自習することが求められた。

本稿では扱わないが、この授業に対する受講者の評価として実施されたアンケートについては、鈴木（2004a）を参照のこと。

4.2. 2004年度前期の授業

筆者は、引き続き2004年度前期にも、ネットアカデミーを利用した授業を実施した。1年生を対象としたインテンシブ英語演習Ⅰという授業で、工学部機械航空学科の学生23名が、学生名簿から機械的にこの授業へ割り当てられた。

基本的にネットアカデミーに関しては、2003年度後期の授業と受講者に求める内容は変わらなかったが、インテンシブ英語演習Ⅰという授業が発信型の授業であることから、英作文の添削指導も組み合わせた。ネットアカデミーの「スタンダードコース」はリスニングとリーディングという受容力を養成する教材で、これだけでは発信型をうたい文句とするインテンシブ英語演習Ⅰの授業としては不適切と思われたからである。このように、実験的な授業を行う場合には受講者に無理をお願いするケースが多く、回避の方策がないものかといつも迷う。また、この英作文の内容は、ネットアカデミーと直接関係がない。全く異なる2つの内容を扱ったわけで、受講者に負担をかけてしまった。授業時間内の教員の活動としては、教材やコンピュータについての質問を受けたり、マシントラブルに対応したりすることは当然だが、管理者としてログインし学生の学習状況をチェックするという作業はとりやめ（そのかわり学期末におおまかなチェックを行った）、その分英作文の添削指導の時間に使った（添削作業を行い、全員に告げる必要のありそうな指導内容は、教材投影装置を利用して、ネットアカデミーとは別のモニタに映し出した）。

5. ネットアカデミー利用の授業による英語力の伸長

4節で紹介した授業では、いわゆるプレテストとポストテストを実施し、受講者の英語力の伸びを測定した。ネットアカデミーの「スタンダードコース」の中にある“TOEICテスト演習コース”に10セット分あるテスト演習のうち、学期始めにテスト演習の第9回分（2004年度前期の授

業にあっては第1回分)、学期末にテスト演習第10回分を受験してもらった。あらかじめ問題を予習してしまうのを防止するため、これらのテストのスコアは授業の成績に算入しないこととし、あからじめ受講者に知らせておいた。2003年度後期の授業にあっては55名の受講者のうち51名、2004年度の授業にあっては23名全員が両方のテストを受験した。

5.1. テスト結果

“TOEICテスト演習コース”にある10のテストは、いずれも難易度がそろうように設計されている（アルク教育社福岡支店東健一氏個人談話)。そうでなければ、プレテストの結果とポストテストの結果の比較が英語力の絶対的な伸長を示すことにはならないからである。また、このような効果測定にあたっては、コントロール集団を設けるのが望ましいのであるが、別クラスでの同一試験の実施は残念ながら実施していない。筆者以外の教員によるネットアカデミーやTOEIC と全く関係のない授業において、13回程度しかない授業回数のうちまるまる2回分を割いてもらって、本来の授業と関係ない試験を受けてもらうのは多大な迷惑のかかる話であり、そのためにコンピュータのある教室を臨時に借り出したり、ログインの方法を改めて確認したりという労力もかかってしまう。また諸事情により、2003年度後期の筆者の担当する授業のうち、ネットアカデミーを利用しないクラスでは、そもそもネットアカデミー（の“TOEICテスト演習コース”のテスト）を実施できる教室を利用できるクラスがなかったので、結局コントロール集団を設けることができなかった。それを受けて、2004年度前期でもコントロール集団を設けていない。コントロール集団のない状態での数値比較に基づく主張があまり強いものでないことは重々承知しているけれども、全く TOEIC に関する英語学習をしない場合に、平均的大学生が数ヶ月の期間に、TOEIC 型の試験のスコアが以下に見られるように大幅にアップするとは考えにくい。

表1、表2がこのテストの結果となっている。

表1：2003年度後期の英語授業での41名のスコアの推移

伸び	プレテスト ポストテスト	伸び	プレテスト ポストテスト
＋18	12/40 (05+07)➡30/40 (16+14)	＋04	14/40 (08+06)➡18/40 (08+10)
＋13	16/40 (07+09)➡29/40 (14+15)		18/40 (09+09)➡22/40 (12+10)
＋11	14/40 (06+08)➡25/40 (09+16)		18/40 (09+09)➡22/40 (11+11)
	15/40 (09+06)➡26/40 (12+14)		20/40 (10+10)➡24/40 (13+11)
	17/40 (09+08)➡26/40 (13+13)		21/40 (09+12)➡25/40 (10+05)
＋09	13/40 (07+06)➡22/40 (12+10)		25/40 (15+10)➡29/40 (16+13)
	17/40 (09+08)➡26/40 (14+12)	＋03	11/40 (07+04)➡14/40 (08+06)
＋08	11/40 (07+04)➡19/40 (10+09)		16/40 (08+08)➡19/40 (09+10)
	13/40 (05+08)➡21/40 (10+11)		17/40 (09+08)➡20/40 (11+09)
	13/40 (06+07)➡21/40 (11+10)		18/40 (08+10)➡21/40 (10+11)
	16/40 (07+09)➡24/40 (11+13)		18/40 (09+09)➡21/40 (09+12)
	22/40 (14+08)➡30/40 (17+13)		20/40 (11+09)➡23/40 (11+12)
	26/40 (13+13)➡34/40 (17+27)		28/40 (15+13)➡31/40 (15+16)
	26/40 (16+10)➡32/40 (17+15)	＋02	15/40 (05+10)➡17/40 (08+09)

＋07	18/40 (09+09)➡25/40 (12+13)		16/40 (07+09)➡18/40 (09+09)
	18/40 (07+11)➡25/40 (15+10)		17/40 (08+09)➡19/40 (10+09)
	18/40 (10+08)➡25/40 (10+15)	＋01	16/40 (09+07)➡17/40 (06+11)
＋06	13/40 (04+09)➡19/40 (12+07)		19/40 (10+09)➡20/40 (10+10)
	14/40 (08+06)➡20/40 (10+10)	± 0	17/40 (09+08)➡17/40 (09+08)
	19/40 (09+10)➡25/40 (14+11)		21/40 (10+11)➡21/40 (11+10)
	20/40 (11+09)➡26/40 (12+14)		21/40 (12+09)➡21/40 (11+10)
＋05	17/40 (10+07)➡22/40 (10+12)	－01	21/40 (11+10)➡20/40 (08+12)
	19/40 (08+11)➡24/40 (15+09)		19/40 (12+07)➡18/40 (09+09)
	23/40 (11+12)➡28/40 (15+13)	－03	16/40 (10+06)➡13/40 (08+05)
	24/40 (14+10)➡29/40 (15+14)	－05	23/40 (13+10)➡18/40 (08+10)
		－07	23/40 (10+13)➡16/40 (05+11)

	合計	聴解	読解	
プレテスト平均点	18.1	9.3	8.8	聴解20点読解20点の計40点満点
ポストテスト平均点	22.7	11.3	11.4	聴解20点読解20点の計40点満点
上昇点	4.6	2.0	2.6	

＊各スコアの括弧内の内訳は（聴解＋読解）になっている。

表2：2004年度前期の英語授業での23名のスコアの推移

伸び	プレテスト	ポストテスト	伸び	プレテスト	ポストテスト
＋11	12/40 (07+05)➡23/40 (10+13)		＋04	18/40 (05+13)➡22/40 (10+12)	
	14/40 (10+04)➡25/40 (12+13)			19/40 (05+14)➡23/40 (13+10)	
＋10	13/40 (09+04)➡23/40 (11+12)			19/40 (09+10)➡23/40 (10+13)	
＋09	23/40 (11+12)➡32/40 (16+16)		＋03	20/40 (11+09)➡23/40 (09+14)	
＋08	14/40 (07+07)➡22/40 (11+11)			21/40 (12+09)➡24/40 (15+09)	
＋07	16/40 (09+07)➡23/40 (13+10)		＋02	18/40 (11+07)➡20/40 (12+08)	
＋06	17/40 (10+07)➡23/40 (11+12)			20/40 (11+09)➡22/40 (10+12)	
	19/40 (07+12)➡25/40 (10+15)			23/40 (11+12)➡25/40 (13+12)	
	21/40 (14+07)➡27/40 (15+12)		± 0	23/40 (12+11)➡23/40 (11+12)	
	21/40 (06+15)➡27/40 (13+14)		－02	18/40 (10+08)➡16/40 (06+10)	
＋05	19/40 (08+11)➡24/40 (12+12)			24/40 (13+11)➡22/40 (13+09)	
			－03	15/40 (09+06)➡12/40 (06+06)	

	合計	聴解	読解	
プレテスト平均点	18.6	9.4	9.1	聴解20点読解20点の計40点満点
ポストテスト平均点	23.0	11.4	11.6	聴解20点読解20点の計40点満点
上昇点	4.4	2.0	2.5	

＊各スコアの括弧内の内訳は（聴解＋読解）になっている。

5.2. スコアの伸び

クラス全体としては、2003年後期の授業においては4.6点、2004年前期の授業では4.4点のスコア上昇を見せており、上昇率は、2003年度後期の授業にあっては25.4%、2004年度前期の授業では23.7%となっている。実質3ヶ月、それも週に1回の授業時間にわずかの自主的学習時間を加えただけの英語学習で、TOEIC に準拠したテストのスコアが2割半程度も伸びるというのは、偶然の産物とは思えない。

2003年度後期の授業では、51名中43名がスコアを伸ばし、逆にマイナスになったのはわずか5名しかいない。2004年度前期の授業では、23名中19名がスコアを伸ばし、逆にマイナスとなったのはわずか3名である。2004年度前期の授業では、マイナスになった者のデータを詳細に検討してみると、その3名の中には、異常に短時間でテストを済ませている者や、教材の学習の方法が極端に片寄っていた（リーディングを無視してリスニングしかしていない）者などがおり、マイナスになったのは手抜きの結果だったと言ってよいように思われる。従って、ある程度まじめにネットアカデミーに取り組んだ者は、英語力が伸びてスコアが改善される見込みが高いとみてよいだろう。

技能別に見ると、リスニングもリーディングも同じようにスコアが伸びている。ネットアカデミーの効果がどちらか一方の技能に限定されたものでないことは明らかだろう。

いずれにせよ、ネットアカデミーはリスニングやリーディングの力を上昇させる教材であると言える。2割半の改善と言えば、TOEICのスコアが単純な正答数に基づくものでないことを承知であえて言うと、TOEIC450点程度が平均である（根拠については5.3を参照）九州大学1年生の場合、100点以上のスコアの上昇に相当すると考えられ、かなり大きな伸びと言える。

5.3. TOEIC 得点予測試験としての精度

5.2で、九州大学の1年生の TOEIC の平均が450点程度であると述べたが、この450点という数値は、過去に2回実施されたまとまったデータ収集に基づいている。一度は九州大学後援会の支援（平成16年度助成事業、教官の研究プロジェクトに対する助成 No.5「TOEIC テストによる入学時における九州大学の学生の英語能力評価」で受験料を捻出）を受けて実施された TOEIC-IP で、2003年度初頭に、21世紀プログラムをはじめ、[5] 幾つかの学部の学生合計200名程度が受験したもので、平均点は458.4点であった。[6] また一度は、大学院言語文化研究院と工学部との合同プロジェクト（平成16～17年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトCタイプ「工学部生を対象とした英語カリキュラムの4年間システム化およびそのための教材開発」）の一環として、工学部への2004年度入学者約800名のうち、受験料自己負担による協力に了解の得られた約600名について、入学直後の週末に実施された TOEIC-IP である。

この450点というスコアは、満点の990点から単純に見るとおよそ4割半だが、既述のプレテストの受講者の得点率と近い割合となっている（2003年度後期の授業では40問中18.1、2004年度前期の授業で18.6という平均正答数もおおよそ4割半である）。プレテストやポストテストに使用したネットアカデミーのテスト演習の問題は、TOEIC の予想得点率を示す指標としてかなり精度が高いと思われる。このように、成績の上昇をもたらす上、TOEIC スコア予想の精度も高いとなると、それだけTOEIC の対策として有用であると言える。

2004年度前期の授業に関しては、「スタンダードコース」に含まれるテストの他に、最終授業の際に、成績評価に利用するための TOEIC の模擬試験も行った。[7] これによっても「精度」の

高さがわかる。この試験は30題からなり、受講者のネットアカデミーのテスト演習でのスコアと比較してみると、表3のようになる。

表3：2004年度前期の英語授業でのTOEIC模擬試験とプレテスト・ポストテストの比較

TOEIC模擬	プレテスト	ポストテスト	TOEIC模擬	プレテスト	ポストテスト
24/30 (32.0/40)	20/40	23/40	18/30 (24.0/40)	17/40	23/40
23/30 (30.7/40)	24/40	22/40	18/30 (24.0/40)	13/40	23/40
22/30 (29.3/40)	16/40	23/40	17/30 (22.7/40)	15/40	12/40
22/30 (29.3/40)	14/40	22/40	17/30 (22.7/40)	12/40	23/40
20/30 (26.7/40)	21/40	24/40	16/30 (21.3/40)	19/40	25/40
20/30 (26.7/40)	18/40	20/40	16/30 (21.3/40)	18/40	22/40
19/30 (25.3/40)	21/40	27/40	15/30 (20.0/40)	23/40	32/40
19/30 (25.3/40)	21/40	27/40	15/30 (20.0/40)	20/40	22/40
19/30 (25.3/40)	19/40	24/40	15/30 (20.0/40)	18/40	16/40
19/30 (25.3/40)	14/40	25/40	14/30 (18.7/40)	23/40	25/40
18/30 (24.0/40)	23/40	23/40	13/30 (17.3/40)	19/40	23/40
18/30 (24.0/40)	19/40	23/40			

	TOEIC模擬	プレテスト	ポストテスト
平均点	18.2 (24.2)	18.6	23.0

＊括弧内は本来30点満点の模擬試験を40点満点に換算したもの

模擬試験の平均値が24.2（40点満点に換算、得点率60.2%）、ポストテストの平均値が23.0（得点率57.5%）と似通っている。TOEIC模擬試験とポストテストが授業期間末にわずか1週間の差で実施されたものであることから考えると、この類似からも、ネットアカデミーに含まれるテスト演習がTOEICの得点を予測する精度が高いことが主張できるように思われる。

6．なぜこのようなオンライン学習が英語力の伸長をもたらすか

これまでのところで、ネットアカデミーというオンライン英語教材が、受講者の英語力を伸ばすことが示されたわけだが、この種のオンライン英語教材になぜそのような効果があるのかを考察したい。

まず第1に、人間の教師が運営する授業では、一人の教師が受講者全体を相手にして授業が進み、個人の活動はほとんどチェックされず、特に活動していない受講者がいても、他の受講者も教師もクラス全体としての学習が成立していない実感がないので、その受講者が周囲から取り残されていても放置されてしまうことさえある。本人も、自分でそう望めば、授業ではぼうっと過ごし、試験の直前だけ一夜漬け、赤点ぎりぎりで通過ということができるのである。これに対しオンライン学習では、個人が端末に向かってアクションを起こさなければ先へ進まず、さぼってしまえばログという形でそのことが記録に残ってしまい、成績に直接響く可能性があるため、活

動への参加が強制されることになる。自分のペースで学習するお陰で、授業展開についていけずに取り残されるということもない。

もっとも、オンライン学習といえども万能ではない。現に、真摯に取り組めば、リスニングのユニットもリーディングのユニットも可変速で何度もトライすることになり、新出単語・表現をチェックしながら、1つのユニットに15分はかかり、テスト演習も1つの試験に30分はかかるはずなので、それ未満しか時間をかけていない場合は成績に影響すると書面ではっきりと通告しておいたにもかかわらず、その基準よりも圧倒的に短い時間でお茶を濁したユニットを多数抱える受講者が異様に多く、授業だから単位のために仕方なくやらされているという気分は、人間教師による一斉授業がオンライン学習に代わってもあまり変わるところがないようにも思われる。現に2004年度前期の受講者への次のアンケートでは、かえって一斉授業よりも学習意欲自体は低下するという皮肉な結果になっている（もっとも、2004年度前期の受講者は、強制的にこの授業内容を割与えられたので、選択制でこの授業内容を選び取った受講者に対する2003年度後期の授業で同様のアンケートを実施していれば、逆の結果が出たかもしれない）。

【1】ネットアカデミーは人間教師の授業に比べて意欲が湧くか。
湧く0　やや湧く2　普通13　あまり湧かない4　湧かない4

ところが、意欲自体が多少減退しようとも、それを補って余りある力がオンライン学習にはあるわけで、そのお陰で成績の上昇が見られるわけである。そのことを感じてか、受講者自身もネットアカデミーの教材としての優秀さは認めている（2004年度前期の受講者へのアンケート）。

【2】ネットアカデミーのソフトとしての全体的印象は？
良い5　やや良い9　普通7　やや悪い2　悪い0

恐らくこのアンケート結果は、学習の効率の良さに起因している。受講者自身、印象として概ね効率が一斉授業よりも高いと思っている者の方が多い。

【3】ネットアカデミーは人間教師の授業に比べて効率がよいか。
良い3　やや良い7　普通8　やや悪い4　悪い1

この効率の高さという点を以降少し深めてみる。

一斉授業では1対多の指導形態になるわけだが、オンライン教材の場合は、教材を指導者であると見なせば、1対1の指導形態となり、学習者は自分に適合したレベルのユニットだけを自分の好きなペースで学習したとしても、他者に迷惑をかけることはない。一斉授業では、指名されても満足に答えられずに過ぎゆく時間というのは、確実に他の受講者の発言の機会の減少につながる。オンラインによる1対1の形態は、効率としてはマキシマムで、人数の点だけ見れば、どんな少人数授業も（日本の大学で少人数クラスと称して15〜25名程度で実施しているものでも、海外の大学で頻繁に見られるように5名程度という日本から見れば羨ましい限りの少人数クラスでも）かなわない。

ここで、一人になれば仲間と一緒に受講する楽しさが奪われ、人間と人間のコミュニケーショ

ンがない無味乾燥な作業に成り下がってしまうといったような反論もあるだろう。しかし、第2言語の習得というのは容易ならざる作業であり、本気で英語の習得を目指すのであれば、機械に強要されてごしごしと勉強することも現実的には必要であって、ネットアカデミーのようなオンライン学習は、楽しさを求めてもよい人間教師による人間同士の授業とは分業すべきものであるように思われる。カリキュラムの組み方によっては、人間教師による授業から単調なドリル的要素をオンライン学習へ移動させ、人間教師による授業をより楽しく充実したものにしていくこともできるはずである。また、同じオンラインシステムでも、筆者がここ5年ほど実践してきているような、人間同士のコミュニケーションの演習に利用する方法もあるわけで、[8] オンライン学習自体を否定するのもナンセンスである。

効率と言えば、授業時間や教室の束縛から離れることができる点も高効率に貢献している。ネットアカデミーは、学内ドメインにあるマシンからであれば利用可能なので、授業時間以外に、授業の実施教室以外でも利用可能である。欲を言えば、学内ドメインの外にある受講者の自宅のマシンからも利用可能であればなおよいのだが、残念ながらこれは開発側が許していない。

また、アンケート（2）に見られるように、ネットアカデミーを受講者が評価している背景として、教師によって力量等にばらつきがあるのとは異なり、機械相手の質的信頼感があるのではないかと思われる。これも学習効果の高さの一因となっているように思う。さらに、リスニング、リーディングともに、教材提示の可変速の機能をはじめとした、コンピュータを利用した教材ならではの機能が有用である点も高評価の一因であろう。

7. まとめ

本論では、ネットアカデミーの高い学習効果を数値で示し、その要因を考察することによって、オンライン英語学習の利点を述べた。こうした方法を大学生の英語学習環境に導入することが、昨今注目されている国際コミュニケーション能力の向上につながるという点を結論としておく。

注

1) ネットアカデミーの運用方法は導入部署によって異なる。九州大学の場合は、利用者のためのホームページ（http://gogaku.kyushu-u.ac.jp、kyushu-u.ac.jp ドメインにある端末からしかアクセスできない）を設け、独自に定めた運用方法がそこに掲載されており、利用者はそこから張られたリンクにより、ID とパスワードによるユーザ認証を経て教材にアクセスする。学生は研究生など、学生番号のある者には全員に自動的に ID とパスワードが発給されており、上記ホームページから要求を送ると、情報基盤センターの教育用システムのメールアドレスへ届けられる。教職員の場合は、オンラインによる個別の申込みが必要となるが、九州大学に何らかの意味で籍を置く者であることが確認されれば（運用担当部局である大学院言語文化研究院のネットアカデミー担当グループが確認・判断する。筆者もそのメンバーのひとりである）、ID とパスワードが、申込者指定のメールアドレス（学内ドメインに限らない）に届けられる。

2) 「スタンダードコース」の“リスニング力強化コース”は5段階にレベルが分かれており、最も易しいレベル1が5ユニット、レベル2が11ユニット、レベル3が17ユニット、レベル4が9

ユニット、レベル5が8ユニットある。“リーディング力強化コース”も5段階にレベルが分かれており、最も易しいレベル1が3ユニット、レベル2が5ユニット、レベル3が19ユニット、レベル4が18ユニット、レベル5が5ユニットある。“TOEIC テスト演習コース”は、全ユニットが同程度の難易度になるように設計されている。

3) 近隣で本格的に人間教師とコンピュータの分業をはかろうとしている例として、広島市立大学の「ぎゅっとe」が挙げられる。九州大学でも試験的に一部利用している。

4) 速度を落として聞くことが学習効果を高めるかどうかは議論が分かれるところである。例えば、メディア教育開発センターの企画・制作による CD-ROM 型の英語リスニングソフト Listen to Me! シリーズには、可変速の機能がない。それは、自然な速度の教材を頑張って繰り返し聞くことの効果が高いと考えられるからである（文京学院短期大学草ヶ谷順子専任講師個人談話）。しかし、筆者の授業の多くの受講者がネットアカデミーの可変速を評価している。

5) 21世紀プログラムは、アドミッション・オフィス方式で選抜され、特定の学部に所属せず、学際的な領域を勉強し、議論や調査の能力を高めるプログラムを特色とした学士課程である。1学年当たり約20名が入学する。

6) 詳細については鈴木右文（2004b）を参照のこと。

7) 市販のTOEIC対策問題集の中から、リスニング15問、リーディング15問の合計30問からなる模擬試験問題を選んで使用した。都合により、書名は御勘弁いただきたい。

8) 3次元仮想空間チャットシステムを利用した授業を、インターネットで九州大学の筆者の授業と北海道大学の授業とを結んで、遠隔共同授業という形で実践している。受講者が文字チャットによりコミュニケーションを取りながらタスクに取り組むタイプの授業である。詳細は鈴木右文（2002）を参照のこと。

参考文献

鈴木右文（2002）「大学英語教育の課題と対話演習授業の新展開－遠隔授業にも利用できる仮想空間チャットシステム－」言語文化叢書Ⅰ、九州大学大学院言語文化研究院.

――――（2004a）「九州大学におけるNetAcademyの導入」『言語科学』（九州大学大学院言語文化研究院言語研究会）No.39, pp149-154.

――――（2004b）「九州大学における TOEIC の試行」『言語科学』（九州大学大学院言語文化研究院言語研究会）No.39, pp167-170.

田中省作・徳見道夫（2003）「九州大学 NetAcademy への招待」『九州大学情報基盤センター広報』Vol.3, No.3, pp149-168.

Enhancing International English Skills with the Help of Computer Network

Yubun SUZUKI

NetAcademy, an online English learning system used in approximately 200 Japanese universities, was introduced to Kyushu University early in the academic year 2003. The system can be made up of various courses depending on the needs and the budget of colleges and universities. The Kyushu University version has a standard listening & reading course, an elementary TOEIC course and a technical writing course.

The author adopted the standard course for one class each in the fall semester of 2003 and the spring semester of 2004. The results of a pretest, a posttest and other trial tests, convince us of the excellence of the system in question and the effectiveness of an online English learning system in general.

The purpose of the present paper is to claim that an online English learning system like this is suitable to develop international communicative ability. We do not argue, however, that this sort of online English learning system should completely take over the job of human instructors. The ideal state of affairs is that exciting and pleasant English classes organized by human teachers are reinforced by intensive training with the help of computer network.